

読書体験と表現活動を柱に「豊かな感性」を育む教育活動の創造 ～学校、家庭、学校運営協議会(地域社会)とのつながりを大切に～

函南町立桑村小学校 校長 渡邊 衛

1 研究目的 (仮説等)

令和4年4月、20年も本校児童の見守りをしている地域住民から、「校長先生、学校があることは幸せなことだ。桑村小学校の良さを広めて欲しい。」という声を聞いた。このことから学校長は、本校において、小規模校という状況下で生活する児童に対し、本校の「強み」を働かせた教育活動を行うことで、彼らの資質・能力を育成することを全職員で取り組むことを強く決意した。そして、学ぶ児童も、指導する教師も、送り出す保護者も、見守る地域住民も幸せだと感じる学校を協働で創りたいという願いのもと、「小さな学校の『強み』を土台に、自然に恵まれた学習環境を生かした体験活動と読書活動をつなぎ、『豊かな感性』と『深い思考力』を育成する学校運営を目指して」をテーマに研究に取り組んだ。

この研究実践では、「豊かな感性」と「深い思考力」の育成を目指して、学校、家庭、地域社会が協働で体験活動と読書活動をつなぎ、推進していくことで「豊かな感性」と「深い思考力」を育成するシステムが確立できたことに成果があった。

令和5年4月、本校は児童が12名減少し全校児童68名の規模で教育活動をスタートした。今後も児童数の増加は期待できず、学校の「強み」をいかんなく発揮し、魅力ある学校づくりを計画的に進めていくことが必要となった。人口減少による社会状況を食い止めることが困難な中、地域住民の期待に応えよりよい学校づくりを推進していくには、本校で実践する教育活動の魅力を見守る児童、職員、保護者、学校運営協議会委員(地域住民)が共有し、これまで以上にその魅力を実感し、積極的に教育活動を推進していくことが求められる。併せて、そうした取組を外部に情報発信し、「よりよい学校教育を通してよりよい社会をつくる」という社会に開かれた教育課程の理念を大切に、実践していくことが必要ではないかと考えた。

そこで、学校長は昨年度の桑村小学校の「強み」を働かせた教育活動を継続し、発展させていくことを柱に、本校職員と新たに学校運営協議会委員をメンバーに加えたプロジェクトチームを編成し、研究テーマ「読書体験と表現活動を柱に『豊かな感性』を育む教育活動の創造～学校、家庭、学校運営協議会(地域社会)とのつながりを大切に～」の具現化を目指して取り組むことにした。この研究では、学校のもつ強みを働かせ、目の前にいる児童一人一人の「豊かな感性」を育む教育活動に、学校、家庭、学校運営協議会(地域社会)が協働で取り組み、魅力ある楽しい学校を創造し、「学校文化」にまで高めていくことを目指して実践し、検証する。

2 研究方法 (検証の手だて等)

(1) 「読書体験」をもとに「豊かな感性」の育成を目指した取組

- ①令和5年度学校教育目標と本校児童の目指す育成すべき資質・能力の設定と共有
- ②「読書体験」と「感性」についての共通理解
- ③「豊かな感性」の育成を目指した取組

※学校長の講話をもとに、職員間で「読書体験」と「豊かな感性」について理解を深め、「豊かな感性」の育成を目指した教育活動を追究する。

(2) 読書活動推進に向けた学校、家庭、そして学校運営協議会(地域社会)との協働

- ①読書通信『読書活動への扉を開いて』の発展的取組
- ②「親子読書会」の実践

※学校長が作成、発行していた読書通信『読書活動への扉を開いて』をプロジェクトチームのメンバーをはじめとする全職員につなぎ、今後も継続して保護者や地域住民との連携を図る中、学校と共に推進していく関係性を一層深め、持続可能な取組へ高めていく。そして、新たに学校運営協議会と連携し、「親子読書会」を本校で開催することを計画し、実施する。

(3) 感じたことを自分なりの方法で表現し、「感性」を高める取組

①読書活動を表現活動を柱とする読書体験へと発展的につなぐ取組

②「お気に入りの一冊をあなたへ 読書推せん文コンクール」に参加し、自分の感動を表現することで、「豊かな感性」を育成する取組

③読書体験を広げる「町立図書館に出かけよう」の取組

④「豊かな感性」を身体的表現で表す「みんなで楽しくヒップホップダンス」の取組

※読書活動から様々なことを感じ、深く考える体験は大切なことである。そして、読書活動から得る喜びや発見は人それぞれで違うものである。読書活動を通して自分はどう変わったのかを自覚するのが読書体験と捉えたとき、表現活動が大きな意味をもつ。そこで、「お気に入りの一冊をあなたへ 読書推せん文コンクール」に取り組むことで「豊かな感性」の育成を図る。また、読書体験を学校図書館だけでなく町立図書館へと広げていくことで、読書活動への興味をより喚起し、読書の習慣化へとつなげていく。更には、「みんなで楽しくヒップホップダンス」に取り組み、表現方法を身体的表現に広げていくことで、その更なる可能性も追究する。

3 研究経過

(1) 「読書体験」をもとに「豊かな感性」の育成を目指した取組

①令和5年度学校教育目標と本校児童の目指す育成すべき資質・能力の設定と共有

令和4年度末の教育課程編成会議で、令和5年度の学校教育目標を「夢に向かい感性を育む桑っ子」とした。そして、本校児童の育成すべき資質・能力を「A. 豊かな感性を働かせる力」、「B. 他者の意見を聴き、自分の思いを話す力」、「C. 自分の思いを大切に、深く考える力」、「D. 自分と相手を大切にし、より良く行動する力」、「E. めあてに向けて取り組み続ける力」と設定した。

学校は児童が自分の夢をもち、挑戦し続けることができる場所である。そこでは、一人一人の児童が自分の有する資質・能力を思う存分発揮し、全ての児童が輝くことのできる学習環境が整っていることが大切である。学校長は年度当初に、全職員を前に学校教育目標と本校児童の育成すべき資質・能力について説明するとともに、児童には朝会で、保護者にはPTA総会や学校便り、そして、地域住民には学校便りや本校ホームページを通して周知し、「豊かな感性」の大切さとその育成について共有した。

②「読書体験」と「感性」についての共通理解

令和4年度、読書活動の推進を全校体制で取り組んできた実績を踏まえ、一人一人の児童が読書活動から発生する様々な思いを「読書体験」へと高めていくこと、そして、「感性」を育むには自分が外界から受けた様々な刺激を自分ごととして感じ取り、深く考え、その思考をつないで新たに形成した意味を自分なりに表現することで「豊かな感性」となることを学校長は職員研修で説明し、職員間で共有した。

また、こうした「読書体験」と「豊かな感性」のつながりについて、児童や保護者、学校運営協議会委員(地域住民)にも具体的に説明し、共通理解を図ることで協働で取り組む体制を構築した。

③「豊かな感性」の育成を目指した取組

令和4年度から本校では、自然いっぱいの学習環境の中、体験活動と読書活動をつないで「豊かな感性」と「深い思考力」の育成に取り組んできた。また、「豊かな感性」の伸張を図るには、児童一人一人が自分自身のよさを見つめるとともに他者のよさを認めることが大切であることから、自分や他者のよさを見つめ、それらを再認識することで自己肯定感や自己有用感を高める活動に取り組んだ。

そして、自分のよさを見つめる目や他者のよさを認める目は、読書体験を通じた様々な登場人物との出会いから育まれることもある。そこで「豊かな感性」の育成には、読書体験と自分や他者の良さを見つめる目をつなぐ教育活動を展開することも大切なことから、「読書を楽しむ自分へのラブレター」に新たにに取り組むことにより「豊かな感性」の伸張を図った。

(2) 読書活動推進に向けた学校、家庭、そして学校運営協議会(地域社会)との協働

①読書通信『読書活動への扉を開いて』の発展的継続

これまで本校では、学校と保護者と連携で「親子読書郵便」に取り組んできた。親子でお互いに紹介したい図書を紹介し合う活動である。これは、親子間のコミュニケーションの関係を形成し、共に読書活動に取り組むという点では効果があった。しかし、この活動だけでは読書活動を活発にすることができなかつたという反省から、令和4年度に読書通信『読書活動への扉を開いて』を学校長は発行した。この読書通信は、通信を通して学校と家庭との双方向的な関係性を築き、協働で読書活動を推進することをねらったものである。この実践では、両者が読書活動のよさや価値を共有し、親子で更なる読書活動に取り組むことができたことに成果があった。

令和5年度は、この通信の発行を持続可能な取組へと発展していくために、担当を学校長からプロジェクトチームのメンバーをはじめとする全職員へと移行した。そして、各家庭においてインターネット環境が整ったことから、紙媒体での情報発信を止め、本校ホームページに載せる方法で情報を共有した。

②「親子読書会」の実践

ICT環境の整備により一人一台タブレット端末が児童全員に配備された。こうした学習環境の整備は、休み時間にタブレット端末を利用し、タイピング等の練習に取り組む児童を多く発出した。こうした環境の中、学校の取組だけでは読書活動を推進していくには限界があることが心配され、新たな方法を講じるが必要となった。そこで、学校長は学校運営協議会委員と協働で「親子読書会」を企画・運営することにした。

この「親子読書会」は、午後6時から午後8時の間に学校の教室で親子が自由に読書を楽しむための場所を提供し、メディアからの影響を一切受けずじっくり読書に親しむことをねらったものである。今年度は学校長が中心となり学校運営協議会委員の鈴木氏と協働で企画・運営したが、来年度以降は「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、学校運営協議会とPTAが中心となり会を運営していくことを計画している。

(3) 感じたことを自分なりの方法で表現し、「感性」を高める取組

①読書活動を表現活動を柱とする読書体験へと発展的につなぐ取組

令和4年度、児童代表からなる読書活動推進リーダーのリードのもと、本校では「エンジョイ読書」を合い言葉に、全校児童が読書の楽しさを味わうように読書活動を進めてきた。「レッツ読書」ではなく「エンジョイ読書」としたことに大きな意味があり、図書のおもしろさや楽しさを味わうことで読書活動が広がっていくことを期待したのである。この取組は町内の小学校の貸出冊数を基に比較した資料からも効果があったことが検証された。

令和5年度は児童一人一人が読書活動に取り組み、自分の内面を見つめる行為を読書体験とし、読書を楽しみそれを通して自分の中で起こる様々な変化を自分自身が感じ、深く考え、表現活動へとつなげていくことで自分自身の存在を見つめる体験を重視していった。

②「お気に入りの一冊をあなたへ 読書推せん文コンクール」に参加し、自分の感動を表現することで、「豊かな感性」を育成する取組

公益財団法人「博報堂教育財団」は、2020年より「お気に入りの一冊をあなたへ 読書推せん文コンクール」を実施している。このコンクールの良さは、読書感想文と比較したとき文字数が250~300字と少なく、作文に苦手意識を有する児童も参加しやすいところにある。また、自分の思いを伝える相手を特定することで、どのような思いを届けたいのかが明確になり、自分の感動を自分の言葉で表現する力が身に付くことが期待されるよさがある。令和4年夏と令和5年の春と夏、本校の児童は読書推せん文を書く活動を通して、読書から得た感動を特定の人たちに自分なりの表現の仕方伝えることで、「豊かな感性」を育てていった。

③読書体験を広げる「町立図書館に出かけよう」の取組

これまで本校の児童は、町立図書館から家が離れた場所で生活しているため、普段その施

設を利用することがほとんどなかった。そのため、町立図書館から「図書館出張貸し出し」という支援を年間3回受けている。こうした状況下、何とか児童が親子で町立図書館に出向き、豊かな読書体験をさせたいと考えた学校長は、夏季休業を利用し「町立図書館に出掛けよう」を保護者の協力のもと実施した。児童は、それぞれの発達段階に合わせ、町立図書館を利用するよさを発見し、表現することで「豊かな感性」を高めていった。長期休業に学校を開放し、図書室を利用することも大切ではあるが、学校教育と生涯学習を円滑に接続するという視点から、今回の取組は大きな意味をもつものとなった。

④「豊かな感性」を身体的表現で表す「みんなで楽しくヒップホップダンス」の取組

「豊かな感性」を表現する方法を文章表現に限定してきたのではないかという反省のもと、学校運営協議会委員の鈴木氏と熟考し、本校の卒業生にダンス教室のインストラクターがいることから、身体的表現を用い「豊かな感性」を育む可能性を追究した。

参加した児童は、それぞれが軽快な曲やリズムから感じたことを身体的表現で楽しく自由に表すことができた。今回、個別最適な学びの観点からも、文章による表現とともに身体的表現を採り入れることで、「豊かな感性」が育つことを検証することができた。

4 研究成果(今後の課題等)

(1) 学校運営協議会と連携し、新たに「親子読書会」や「みんなで楽しくヒップホップダンス」を企画・実施した。「親子読書会」では、親子がじっくり読書に向き合う姿や図書の楽しさについて語り合う様子が見られた。また、入学前の幼児が参加することにより幼児教育と小学校教育の円滑な接続の視点からも効果があった。今回、「親子読書会」を開催するにあたり、学校運営協議会委員と打ち合わせを重ね、熟考する中から単なる読書を楽しむ活動に終わることなく、「親子紙芝居」の開催といったように、より楽しいアイデアを創造していったことの意味は大きい。また、「みんなで楽しくヒップホップダンス」の実践でも、「豊かな感性」の伸張が文章による表現だけでなく身体的表現による効果も大きいことが検証できたことは大きな成果である。そして、「よりよい学校教育を通して、よりよい社会をつくる」という社会に開かれた教育課程の理念の実現のもと、コミュニティ・スクールの機能をいかに発揮し、学校と家庭、学校運営協議会(地域社会)が協働で、持続可能な活動へと発展していく体制が確立できたことも大きな意味をもつものとなった。

(2) 本校児童の「豊かな感性」を育むためには長い年月が必要である。これまでの実践をいかに引き継ぎ、発展させていくのが大きな課題となる。本校の強みを働かせた教育活動の歩みを止めてはならないからである。そのためには、教職員、児童、保護者、学校運営協議会委員をはじめとする地域住民の本校児童の「豊かな感性」を育もうとする思いの共有化と発展的な取組の持続化が大切なこととなる。学校長は、令和4年度に開発した読書活動推進の取組を令和5年度はプロジェクトチームのメンバーと共に取り組み、その一つ一つを協働的、発展的に実践していくことでその必要性と可能性を丁寧に伝えてきた。令和6年度以降においてもプロジェクトチームが中心となって、全校体制で読書体験と表現活動を柱に「豊かな感性」を育む教育活動を推進し、更に発展させていくことで「学校文化」にまで高めていくことが期待され、その道標を確立できたことは大きな成果となった。

しかし、この研究の成果はすぐには形として現れない。桑村小学校で学んだ児童が「豊かな感性」をいかに発揮し、母校を愛し、自分の生まれ育った地域を誇りに思い、それぞれの夢に向かって突き進もうとする姿が見られたとき、それは成果として評価されることになる。これからも桑村小学校は、学校のもつ強みを働かせ、目の前にいる児童一人一人の「豊かな感性」を育む教育活動に、学校、家庭、学校運営協議会(地域社会)が協働で取り組み、魅力ある楽しい学校を創造していきたいと考える。

5 終わりに

桑村小学校では、PTA広報誌『こだま』を年3回発行している。令和5年3月の広報誌に、当時のPTA会長が「桑村小学校長 渡邊 衛」というタイトルで次のような文章を寄せた。

「桑村小学校長 渡邊 衛」 令和4年度PTA会長
ばさばさに乾いてゆく心を ひとのせいにはするな
みずから水やりを怠っておいて
苛立つのを 近親のせいにはするな
なにかも下手だったのはわたくし
ダメなことの一切を 時代のせいにはするな
わずかに光る尊厳の放棄
自分の感受性くらい 自分で守れ ばかものよ (詩 茨木のり子)

校長は、私たちに何を問いかけ続けたのか。読書への情熱、子供達への深き眼差し。彼の生き様から、学ぶべき示唆が富んでいると強く感じる。「深い思考力」と「豊かな感性」、校長の言葉が胸を打つ。私達は言葉で思考し、語彙力は感性に直結する。感性は皆に平等に与えられているが、それを豊かな感受性として開花するのは人それぞれである。人間としての営み、そして命の深みへと誘うのは言の葉、言葉なのである。言葉は種であると。心の大地にまかれた種に水を注ぐと様々なものが育つ。それが知識であると。読書はそれだけではない。必然的に孤独になることを求める。自己との対峙。内なる自分との対話。深く己と向き合った魂から何を創造するか。豊かに生きるとは何であるか。あなたが選んだ道であれば、どんな答えでもいい。教育者として最善を尽くす。生涯をかけて…。

冒頭の詩を四年ぶりに再読し、感受性をいかに開花させるかを学んだ感動が鮮やかに蘇り、私も導き手としてどう自分が在りたいのかPTA活動を通して学ばせていただいた。渡邊校長先生、本当にありがとうございました。先生の蒔かれた種が、これからも開花し続ける未来を確信しております。豊かな言の葉を丁寧に大切に紡いでまいります。読書は内なる自分への旅路。アミダで強運を引き寄せた自分にも感謝。阿弥陀の会長ここにあり。(完)

(令和4年度桑村小学校PTA広報誌『こだま』より引用)

PTA会長の温かなメッセージをたいへん光栄に感じると共に感謝の気持ちでいっぱいになった。そして、自分にとって、今年1年取り組む大きなエネルギーとなった。昨年度スタートした研究実践をいかに持続し、発展させていくのかが自分にとって大きな課題であったが、プロジェクトチームのメンバーと協働で取り組むことができたことは大きな意味をもつものとなった。会長の寄稿文の一節にある「先生の蒔かれた種が、これからも開花し続ける未来を確信しております」という文言が実現し、この大好きな桑村小学校が未来に向けてますます魅力ある学校となっていくことを切に願う。